

【議事】定 41

(1) 宇宙教育センターの活動状況について

JAXA 的川先生が資料 41-1(宇宙教育センタ)をじっくりと説明した後、下記の質疑応答があった。宇宙教育センター設立から一年を経過し、経験を通じて学んだことの報告であった。

青江: 的川先生の所の 10 人位で出来ることには限度がある。同じ文部科学省の別の部局が教育を担当しているのであるから、そこに働きかけて、学校教育に宇宙を浸透させるようにはできないのか。

JAXA 的川: 先生の初任者教育、10 年研修に宇宙教育を入れた。これからレギュラーになると思う。

青江: 教育の方に仕組みを入れる手立てを用意できていない。宇宙機関がシャカリキになっても高が知れている。

森口: 私が担当しているのは宇宙と海洋であるが、宇宙がやりたいのと同じように、海洋にも要求が有る。宇宙だけを特別扱いにはし難いのが現状である。

青江: 的川先生がいくらやっても限度がある<sup>1</sup>。

板谷: 局の方から動いて行くのは良くない。好例を作り、先生方に「良いね」と言って頂き、自然に広がっていくのが良い<sup>2</sup>。

---

<sup>1</sup> 限度が有る位が丁度良いのではないか。的川先生は、「教育の導入部分に宇宙の情報、例えば打上げの様子をビデオで流すと、全ての生徒が興味を示し、ロケットの燃焼の説明をきっかけに熱の勉強を始めると、生徒の集中力が向上する。」と、説明されていた。また、そのデータベースには誰もがアクセスでき、ダウンロードできる。使いたければすぐにも使えるようになっている。

<sup>2</sup> 同感である。意図的な妨害があれば、局が出て良い。

青江: どうにかしなければ勿体無い<sup>3</sup>。

JAXA 的川: ナノテクとか、バイオテクノロジーとか、国家が重点をおく分野は沢山ある。その中で、「宇宙」はそれが各分野の技術を利用し、総合的に構築していく分野で、宇宙が特別の力を持つことを伝える努力を続けたい。

森尾: 2 ページに、「宇宙教育が目指すもの」が示されているが、高邁で結構である。これに対し、子供たちが興味を示す教材が大切である。メーカーから古い物でも良いから、貰ってくるようにはできないか。

青江: メーカーに言ったが駄目であった。現物どころか模型も<sup>4</sup>寄付してもらえない。

松尾: 青江委員の主張に賛同する。それにつけても宇宙の話で導入すると見ない子は居ないと言うのはキーだと思う。

JAXA 的川: 宇宙を議題に QA をやる機会があった。主催者は丸一日は長すぎ、子供たちが飽きてしまうことを心配していたが、やってみたとところ丸一日質問が続いた。何年かに一回しかできないが、これからも続けて行きたい。また、一年間不登校であった生徒が、これを機会に登校するようになったということも聞いた。

米国ではナノテク、バイオなどの重点技術が横に並び、宇宙はその上にあって国として大切に扱うようになっている。日本では横並びで扱われている。

---

<sup>3</sup> これは「宇宙」の側からの論理で、教育現場の論理ではない。このような機材があることを知らないのであれば、知らしめるくらいが丁度いい。

<sup>4</sup> 模型がどれほど高価な物か分かっていらっやらないようである。

森口：良く聞いていなかったかも知れないが、先生方を教えることはやっているのか。

JAXA 的川：本当に聴いていらっしやらなかったようで。

森口：どんな規模で行われているのか。

JAXA 的川：一クラス 60 名程度である。

森口：原子力も先生方の教育を行い、同じような努力をしている。

青江：原子力はちょっと特別である。

JAXA 的川：初任者研修は先生方が皆熱心であるが、10 年研修は少々熱意が薄れている。それでも「宇宙」だけは盛況で 20 数名が集まっている。

また、教育学部の冠講義に取り入れていただくように、長崎大学と検討を進めている。

井口：講義を受けた方の追跡調査を行っていただきたい。

JAXA 的川：コズミックカレッジのアンケートを見ても、自分が把握できていなかったこともあるので、追跡調査も行いたい。

井口：自分が子供の頃に自動車に憧れ、自動車業界に道を進めた。「大人になれば宇宙に行ける。」と云うことは出来ないか。

青江：それは宇宙開発委員会のやることではないか。

JAXA 的川：その頃には私は居なくなっているでしょうから、無責任に言うてしまうことは出来るかも知れない<sup>5</sup>。

紙面が程好く余ったので、蛇足を付けさせて頂く。

小職の父は勲と云い、一昨年暮れに他界したが、国語教育に生涯を捧げた。

山梨の高校の国語と漢文の教師として教鞭をとり、学生の国語力の無さを痛感した。それ以前の教育に問題があると考えて、中学に転勤し、更に教育委員会指導主事、小学校教諭と転進した。此処で最初の実験を試みた。小学校一年生の国語の教科書は全てひらがなで書かれているが、此処にある言葉を通常の漢字かな混じり文に変えることを行った。自宅でガリ版原稿を作り、生徒に配布し、親の協力を得て教科書に貼り付けさせた。

この方法が功を奏し、国語ばかりか他の教科まで優秀な成績を上げるようになった。全ての学問の基礎となる、読書力、理解力を上げたことがその理由であることが解った。

しかし、明治政府以来、漢字は難しいもの、当用漢字として使用数量を減らすべきものとして扱ってきた、先人たちからの路線に反するものとして文部省(当時)に受け入れられることは無かった。共感し追隨する先生方が迫害されていることを聞き及び、小学校を去ったが、母校に拾ってもらい、付属の幼稚園の園長になった。

此処で、小学校より幼稚園の方が漢字学習能力に優れていることを知ることになった。

学校は校長の権限が強いので、校長が熱心であれば石井勲式の教育を行うことが出来るが、多く採用されてはいない。厚生労働省の管轄である保育園には、文部科学省の意向が影響しないので、石井勲式を取り入れて貰えている保育園は多い。

このような父の生涯を見ると、今回の青江委員の発言は、底が浅いと感じてしまう。

<sup>5</sup> 冗談で言っていたら感じた。